へ 違15
1.715
3止

大通俗一騎夜行巻之四

志水燕十述

挍鷄を園の花にせる姑獲鳥

嵐にむせびし松もちとせとはしらで鷺によくぞうれ古し
塚をすぐまで田とかり思ふに所ちぐふかたくかりし
ありしさまと云ふから情より乳呑子と出しく
脊中に及ひてをくれの髪が据にかゝりしを現世
の人乃口の葉にうふる産婦とて雨夜のつれ〳〵に
嬰子を抱ひて人に子を抱ひて下さいと頼みけるに
渡り来りのくさてと云ふがうし消へ失せるよし
ほとも見えをやらひて世の人が笑ふる事のなりまで

門 ヘ 13
號 1715
巻 3

其間にも其人抱ひつきとうろんきま、石仏の如く
おせさりと謗れども見るより其きせに有仏の如き
弟子を人に抱せんと丈夫をさかし多くなるを
うしろの家業と藝者と云又踊子と呼なく
鎔の吸物の類は混ぞるるかもしらぬ川花の茶よは
上野花見の日の袖に知られぬ也を着て女
あるましき役者の羽織を着し又五枚重三枚重の
着物せ袖乃草履を履ひて地口と云ことを覚え
同くもひきぞろの丁そゝと拳で捕られつゝ下袴
男伎茶にしたすのさりぶし吉原拍子にめの芸と

浅黄縮緬の下帯が丹なる其古気黄が涼風に見え世を
おすやうに乱しつゝもくとうん人へ樋椊の三味線は菊岩
うるさき價ひといふは撥のさい尻の紋は合流の光
を盛し根元の合わせ飾り紫の細工細やかなる糸は座頭を
もつてなしとし其中は家の中と菓子をとんぞ
絵かり混紙をとゝす妻を楼舟の二か砕ひ姫夜の床に
かく見る袷の表を拵へ出しそぬは雪の年忘れ
ちと姿を覗む人の絵鉛鏝と合ひ下姿女にして
ふる男子は世の艶色の姫を漢家は虞氏楊貴妃
王昭君宮娥するも羽帝の鳩の子歳差の家より

男舞と云ふ事始りたり後に水干に立烏帽子を着
舞ふを見て女舞と名付て流れを汲む踊り子は
形は女なれど男とは先親の気させて遠慮なること
なり女は母親の素ぶりを見て心掛の幼少の時
よりいふに嫌しき生れなりとも心さへのどか賢うり
賢にてらつさまでうけしだらしんと云ふ女文の如く
よ習ひ讀物仕事を習ふて教の道をとアノ師匠は
手ならひをよく女の心をかひそへてて神様が
云ひとは編して読物も女庭訓よりかる云ひ名と
八の師匠ししてこそ秋の彼岸より中今は独して

うつらずるなどとても氏神様の葉を挿しつけ
幸ば因縁をも双紙を干しかざし女ごと安く楽しなさる
三筆はかし思ひ讀物は難のなく面白さのまづ中く
筆がお来て腕を吟ふく仕舞ふを一ヶ出度れ作りだん筆が
娘の乞さるまが誘ひよ来て サア おうてさんがひるなりて
吉やアきまの小者さぶんと云ふ中した ヨアノ今ノ よるの夜鶏
事さらずし船せんちくしと云ふ文字に絵合ひやうを
よともひ路次は安結く河の様を草履下駄と納
下駄の音うし唄しくも出てしてきたしくるるを
薄ひ黒ひ衣に袖を切りも文の様をかしきや

かれさ残て大きな役の出ひて有る踏子を引ケし
内へ這入して史より銀子わ余づ並んで居る所で
起請誓詞をも其まゝにせいとすいよの重くして色
とかくれば親父は親みをいうと参じ母親は満ると
仮初にも斯う一家を色して我を望むて紙を
と来ると先に白をきうて一春先に往て見る手が
内に居るやうでされども翌日の宿かりし旦那が
六ケ敷ひれ愛屋の御役語が出ひと思く分離縁と
身を嫌して糸をおり嫌ふして内に居ると座敷の伯母屋の
取りて月給よ嫌れ書乃挑まれ恵比寿様く一服

語をいひせまらば太鼓が頭の入出でとざうしをしひ
ものがかしく出るしく座敷を勤るが夜へひとされど
母親あうしてその手に就りいたかしく藝者の頭續
で座敷へ出てをもしくしどかさも御免なさら西し
とふしぎくりあて三味線弾乃蓋を引ケて練く江
麻の手拭をさして魚成婦へひき上記と
あらぬ振へ立て洞子を入合と活楽をなし南京の出る
氣色をし深山として花のあるりいよぎて吹かし
魚と氷とへ飛鏡京庵子いらぬと婦くみし櫻
花さうしで蒼ん風情ありありと三味線を

下に置き安かし安ゐ好まれく布綱子の一手をおし
似くして三上りを弾出す琴源よ至てめつらしく人小
手をさけせてる廉らしひ宮と云んぞて今ハ今年十年と
名を得て人はさしおし新げ旅子みる良子小る
めりゆえを数へしき家内へ引き也ミおな代々小月之バせを
すると住居の湯へまでゆくどふやうしゆへ好
良子かしく住連ハ越そゆへにおかしく親くれ
ろ當でぞとふ幾娘が疏ひそのと好もゆらう
袖江へ行るそぞとしてあれ朝ま入によおる起されて
飯を喰つゝ湯置を始く湯へもして際と殴を

結ひ住家へハ七つ下りから安祝そ迄まづすごせしと云
魚が表にあらハれやれ沖る家橋がある んぐんまでつけ
まこと堤が祈たる不村が雜蔵者れ寄に小十兆が
雪月花を魚によつミかたんひと写し綻をつ縫ふ
とハおしすんけでく茶漬あるを喰ふては住ゑあひ
猫や鼠と闘ひしうずうさかくくの一中る茎が身をそ
ひやしくゝ風色ハ国ひ者の伝どたんく香ひたい黒
儒子をめりが悪ひとのよへだて三股めの切よ経
廣神仕ゐの放蕩りのと猪び合路よ扱合せれ
見さんのかりる菰者と初そのまかづて滴行な

流れの身となりたる事を観くが遂れがたる人に拘せられ数々の詞ぞうし昭まさも云ふあり時めき時より鍛錬乃いつしか世の中に継ぐものでこそさせるが女の道なるべきは浅ましく悔ても益なく猶よに拳と身るもとうし事も仏を背しハ凡夫なり然れども終にまた仏なりしと明ひし祇王祇女が發心大相国の氣にさからハぞ居なれ寡に常楽我浄の觀を凝しく仏の善知識を招く人の親そしては益に止りと出ましとおしたる身に捷ひ山居の文積潟熟たと名を添ひ代なる人の案と孫せ今ハ嫁

技藝をならハせてく子捨藪にしたる山吹の色を増す唐の太宗ハ鄭仁基が女をえて花殿に入れんとせられしを魏徴大臣彼女ハ旣に夫有りと云しかば殿に入ることを止めらせしとかやこのものを襟元に付ひて誰にも彼にも面白くとうしきこと云ふ業を付て藝を売にかりし情を売なりかりして己がんざしと市のせりうちの小する方理かしずや藝が身を助て孔明が楼上に琴を調て仲達を退け張子房が笙の音色に秋風に歸しい上への藝は河ずんの調に乃涼きようさる庵し村上帝れ深じの琵琶の音色に廉承武

天下りて上玄石家を継し右京亮の徳よう殊
周のしん小智がかり家を尋ね尚し深正お弼
仲臣ともきんで密なれ御るに勝てまで、見ると
尋も出ぬさ思と大笑ひよかる事をとう思が笛を吹
北邪く忠丈意の孔言を知つさり陽ノ連と
来ぬ清泉るで陀は結さ附今の世れに唐しずれ
女かしは大きい小れ世話イ、和が行しとふ正観ら忠が古代
のことかしさきおて一つ小い御文様町中納言宗範の
仕付れ宜ゆく周備の臣れ入道の娘とんで入しい
りのでかづつらが業の頃が嫁ひで業を唸いるゆく

嫁入りとさせさる哉吉田法師が著るぞかりけるにも
隨分女子を育るかし我くが如く人よ子を抱せさ
がるとかられかんけるもつんけるも産婦く産後の多を
識す於淵る秋光が黄澄るの往かりある河原季武
同也浚りと云ふまで争ひしと宇治亜相の摂津り
出きあるよりましての女の羅乃深きすすと人にり
止む名利の二字れ外に欲がひと云胸の火を焚付
嫉妬の嫉ら飯さんとするまで限く伸てやせ
ませふと云うち嬰子が泣きまけるぬ声ぞ
此子を寝せ付るうち待すく

十露盤の桁をそろへて置屋敷
鵜の姑獲鳥が膝を立て懐に入まゐらし乳呑子を抱て
赤坊ハ明日をもしらぬ身の此の小屋の飯にまして
添乳と云ふ合辻番の様な所に乳母の集りて云やうに子
此処に寝かしてゆするより初子を寝せつけると云ふのハ
今ハもう云ごとく女の眼にとても添乳もいらぬのハ
昔くらべ今ハあゐても後の世乃物語にまのあたりとて
暗しかるに今は古き昔のものがたり撲りに江戸の今と
云へるもので武士の雑掌に一二三を五六九乃不審割勢
の人にまかりかはやけさるを好みず明暮

又鍼丹の受る丸如く武術の稽古也一とつさし
事でもあらぬ五六九つの歳よりより人乃此先祖より傳りたる
四十枚有りし家にて宇治の皿と呼ぶその所ハ巨勢金岡が
下給して源氏物語宇治十帖を画きし大磨須會絵図一
渡して唄気の焼餅と一所に焼きもる四之辰の大晦
又ハ在国の振舞にあらざれバ宝蔵と扉を開けぬ
金年をも五六九つの鍼術と好む例の通り味噌の
毎月して煤掃の御飾も見ぬなど見れバ
けつかるさのかくハ宝との云もついでに申しにし
仁をひちかしかる小人の年古次戸まで入るを

隠居となりて後石之助へ家督を譲りけり
然れバ例年の儀式にて件の皿を出させ給ふ
勝手働きのお菊と云女を呼んで器を渡し
定法乃皿を扱へと云付しが日比彼女に懸想お菊
生れ付にて少しも老の茶屋の石よく
間に合せてくれとまごとも二ツ三ツ取ごけ或日
底を抜あるが恨まれけむ流しの下へ投込んで
時にけるが今日皿を扱へと云付けれバ
皆様しまし引あるが足らざる皿一枚より外
なかりけれバさる大き小怒り立其奥の殿間

扨お菊の祝儀にも家重宝の膳具を損じたる不届
家来へ疵を付るのみならず再び今を損んでくれ
貫るを恐ざると云事ハ若党乃ん御家風
お背きせや百姓は益人主か杜丹様御門前を
取て出けれ我背手かりとてる小手に締り上
座敷の大思様よ縫し付家来小云付当座させ我を
公用繁し此日罷よ所ふべしとて屋の御殿へ上りけれバ
お菊ハ只泣より外のなかりく独り胸の中では日比
信ずる大師様観音様より外に病でなかれバ
浅猿も祈られずや悔しくれさるなかれバさりとも観音

を身振し口のうちにて祈りければ我朦朧として
六腑に雪伴に煮湯を飲むごとく五臓の焼れ草を
一つましてみ手に鋭き心を苦敷しくいたし候てかまへ乃
口名我擽しまししかりしりかんでありまし何卒
此縄目を解き放されくださりませと祈りければ
若侍どもも是は案外酒に酔と祢宜が落てもと
知り思へる所仕舞しかと荒縄を喰切りて縛り
くと門の戸を明て逃出せば夜もいまだ明けぬうち
此書付の黄の木をそろへ破りて雪と霰と逃さり
まるを一つ番館のよくまを呼付ちゝ鉄久が前金を

落してかけし八ぞ出て来る鎖の外しと消しは若
侍ども謹ゞ様よと到しかれ追懸けるが右兵久が籍ま
ゑんへぞいうぜんと云うちにアレ向の松原免り小後ろ
姿が見へ定もしなけれ右兵久は胸く松原の此松堂
小腰を懸てゆるくと支度を待く逃出したりしは
鉄炮別当が羅生門にてそどろさる水泥も立が
如くに追懸られて右兵久は途方もなく村々の
桶屋よ井戸がたの搦く書置おりしてかかりけれど天の
与へと悦び彼中へ隠もりけれど追手の者様子はいよ
さくと尋れども来る夜のいくれくれにまで薄霜よ

悪行のかり成ぬべくに井戸がへの中までもんえはし
とて手継を実ことにられぞむざんやなきてが独寝
をきしましで一継出て仕当られバアフトぶ二文なきにしど
ろき井戸がへを引くりとて苦死来生ある髪を
手継の六本一口めして逆さまに縄し上て差荷ひより
尾発へうつさせられぞて弦ゆや我悲せひ嘆
きで食べきうとなとひせの脈りして切られで
ともある黒も論なく変人は死骸を渡して捨き
のかりとなりけるが惨たる附をせんし申る
附とせはせられると申して葬式の一ツの如くに於て

春の末よりかくして病気附られて医薬の匙よ已を
加減すれどもそのしるしもなく桜散て
卯の花くだし降りつづき初夏の郭公夜を
寝ざる事もなくして終る秋と云へども病の床の
起臥よまどりくして夜れ明るをもまたれつつ侘しく居
らりけるよ花橘の袖の香よる常しの人の月乃かかり
侍との方まで来きくるあれかの世へられぞとまたれつ
ふせぎに云ひ耳成そばそ中されば何事や雨戸
扣の簾けさる音しく細く益れよ物凄く軒の
傳ふる雨滴の音に交りし扣く鉦を一枝二枝三枝四枝

又枚六枚七枚八枚九枚とかぞへ終て割砕し皿の数
続合九枚と云かゝりしがさえんへふりむかし九枚終七枚
六枚又数四枚三枚二枚一枚と落かく読んでも九枚の数
神ならぬ身にも九枚の皿をかぞへるや残念や我は
地獄の浮責よりも此九枚を砕きはせしと閻王の
御前にて争ひしとうらみ月奥ぐ鼻而しけるが彼
九枚換ぜしに違ひありしと云れしを安心の様ならず
経中毎進ひ来く砕し皿を改むる度ごとにつぎ
同じ古きの宝を換ぜし始とて思ひしれ終無
責已とて九ふさひ知らさて直に悪をきらせ

耳に入りし物凄き詞の一言日比の勇気もなくぞて
震ひつゝ念仏申て居けるが夜も明方に精気
立を逆義すれどもさしたる変事もなかりし
雨の夜は人静まる折柄は毎夜如此なりしが主乃
病気同くよふくうんかぬれど観音経
祈祷の護摩のさゝだきとめられば日比
とえ九字へ百万遍の念仏にて来る悪鬼仏
せる得ず和尚へ来り例の話を為して幸
今こそ霊を泣ずで語り其言と同意して非業を
がんとて霊より櫃を携へ札迄て東方の風化

祈とはなす振りで大般若轉讀と初めける已にて
夜も丑満比大般若六百巻轉讀して百巻
終んとする時村落の凡とおびやかしの
露なる山の煙となりて消えつる生死流轉の世
のさだめ更に絶ゆる事なく初めなきた終しなれど人を
殺さばましてわが身に罪を受くとし破りし小我
命をとられてこそ恨めしれ尚とて例の金丸投さ
救へ来れし弟子和尚も沸しれたりと合掌し門
入る槌ふ般若はて定者必滅會者定離とは佛の
金言己女なりとも能く心得よ者称は必亡ときれ

經之弟世に約束なきは何ぞ欲くにたらんやとい世相
をうんざるや天帝より汝らは未二合の夕二度の佐は經
初る己と為り向ひ南無阿弥陀仏とと十念を九念まで
けされば鶴の常に違うく菊が姿も消失れく
弟子和尚は極上より下りてかく晩より公雨の晴れゐる
如くなりしん青し公は猶敏いさ知らず人に時如き
法力者あしんや其前無亮禅悩で維仁佑徳よつさ
なひ常に振頭く淑平の將門亡びまし其時は
合ればおら彼よ受るんやと唐に吐くやるは大般若
み而者も轉讀よ出る時彼方亡靈の昔も終よ真楽

に一時藤岡と云へるぞや百生まで皿を破し罪にく
るしむ者にまかせて浮ひかし又十念を丸々
さづけしも一念化生の喜び幼仏の縁の力がさやし
弟へ出ても思ひ面と云須文の人々と去るが悟しく惜しくて
今宵の様子を伺ひける月も我山に寂滅為楽に
読の声もすこし残り初夜も過ぎて後夜に移らんとする
時雨の音静りて又お菊の声に皿の数を読み始
和尚手拍子を取りて唱の大きく声にて一から大きく小数を立
悪き入坊を夜も深ければ招きおせと云つけたり
東雲の比裏門より招き放しおる室の剣升時

帰る和尚手拭下部盗人に追銭とやらで人の恩へせあて
目をそで隠したしと云されどもアア古き蒲鉾で年の
菅笠を遣りければ説に大般若百巻読んで百巻
おせしゝふ施に笠一蓋に有付ける人未だ世にぞなき
百巻の取に笠一蓋と中るより説観説法して
今宵も安居院乃法印説じて営を取りける其数
例の制限におきくが数とて皿の数を読む時に法印きくに
云て回汝弟に知識来りて念ず寺す来る事を所と
云へどおきく苦云ふ弟の和尚大般若や續栗さず
そゞ上へ十念を一念称されしは乃本で乱に

鵜ヶ瀬又左衛門受出のんでおきゝると云ハ法印
御申しはのうちで唱へ汝が破りし皿の数ハ九枚なれども
九品の臺の数に合ひ捨ほる源氏十帖ハして小菊紙る
の法と蓮一枚破れおりしハ一仏一体の道理有一念
乳きたしと云ハ、乙て中年八ッ年ぞ八十念ふして中年の
八年ぞ八地法花の女人成仏を得んと鋭ひなし
南無阿弥陀仏くと唱へられし西方の手をおしそ
子供の脈気をすらひやらとせらもしらば、古菊ぞ
西方ハ手をおし親指一本おして脈気の針を押す
附よ法印冠りを振り又脈気をせしれあれハアラ

嬉しやと云てうさけも如く消るりと云ハ九ッ法印に
向ひ法印ハ脈気をはまし仏の法と申バ西方れ
まを出し法陽合体し又玄て十枚の数調ひしと
いつもり法辨くちきく女の鋭ハしきそく親指を
おきて九本指をおせし其九枚破りけりしたとなる
あり其で去十枚の数合さりと某が脈気をせしハ
とさしバからとと云をやつくり皿の縁ぞかしと云れ
て一座ハ面く感心しにり郎や若法印ハ無或アゞ
又十余帖を出きまし源氏借字の等師の九ぞ活
十帖の皿を破りしよ安居院の法印に成仏させしハ

毒理のねことあり乃り實とハ女乃靈れ添さるを
老へて怪さゐふべしと件の本ハ中へ消失ぬり

大通俗一騎夜行巻之五

拂ミ現世乃樂を語す

志水燕十述

扨その頃より一疋の大蟇座席よつてありて陳ぐと
吾乃編とゆく小路眼このみ多人を導き為はいぜ
我もその昔ゐ海さる月書ると門にうしかり
此れくお酒道と仕くきて文て豊かて出あり
しが今る教年れ畢竟稀りて拂くと云一名
毘ひそる名付世俗拂く小集んとするにる類へ
松脈と換り求て頭をまつると俵も然まちるる
有とこそんの蟇の利口より仕ゐまる人の口合を仕と

来る山の仲間に加しんより山奥に居を定めて
楓人の浮月を助るが宜しかしん先づ数く一羽を
まゐるより人の自弟事南京返し黒仕立の半端
八つに黒白ひ不る歯と常れそかく鴻汁り山の
後に月の端の宵ある熊の如くまつち尾れたるより
云ひすがり神の呉服やも裾巴しの切と横に付て置たに
習ふ口伝と数ゆ毎日屋と云雑巾売あり、御国丸を
書ひさ女医者の看板有鏡や恐ろ門の湯漱船
世に〳〵阿しく孫だと申し出て人々の不そつきるてと
方見る葛笑代の下なる邑し宝の水に富家

さく〳〵棒の仕舞二文四文の荘乗りと成り伽羅縮
帰りは娘く揚手の姉と誂る中なとぞ寄場の
上総札れる年紙合とうたる中に一割増しう
書付華納の挑灯乃名ある大文字あると云て
くらしと是と所謂世界の人々とはし汲くき
に斗りなり中一銭を極ぶそのまゝ銭の先足
う盛るく菓道なりしぞ袖口の菓子より紙帛紗
搦さうちつと喜が縫く御みて風呂敷きるそ枕
屏風の二枚折と混雑せ悪きに工夫とけくし
銘をとる争れよをひろりしかと云菓碗の蓋石

サア是からが餘興のにぎり也書店の名ひろ
次組りが出来ると中立後座の見物て浄瑠璃小
牡ひさ中くにかんでそろく押しげなくかれ座
と云客を呼集め求る茶屋迄の引附を遊て
捨金など云ものを書して池絡の口に書ある星件の
囲どのべ書ある子キ又代の名とりして門人名
小おん之識や多めの上書は何く宿屋神納浦太鳥
杯と書て中さこその封のかゝ小弁たがかくて名初る
と此様べ各以とうんろやのくくの文花を皆
いう名女有人立ての心の楽しくよせられてその

人よ見せんよかしの趣向あつ又そろ人々参三月
十八日押と何々神仏の縁日を見繕て茶屋を借切り
通れ座敷中出花會出物引附ちやくて流の
太文字を拾板一ありて年を出して当日よ
あまぞ三階下幕あまし毛氈を安置
ましして獅子口よ牡丹ハ富貴の人乃生ると答く
鉢舟よ杜若の一色ハ堀の亭まれ鉢よハ
枝垂柳よ才覚の為メハ番所の座敷で
然て役人の趣向をぞ人も花の面白さいふも行く
なりかんものかれた白鳥れ先きへれをさらくとされが

生花と云ハ図斗りに留の枕うちにと揃好の大きな
瓶へ文禅花卿抔と鳥石風を真似さくる
書ひて法付る心の座敷へ向に生花生よ淫乱の
一つと見る者も法付ず外より深く寂さ生き
やうに水際立て一應の見生とうんはる趣ある
皆花のこゝろは何くやで究極の心之古代もあり
うくす芸者に姿嬌ひかく生たる者に投入と
唯今へ世花瓶へ閑浮極をつの心や釣瓶の耳へ
赤梅檀の香木抔と羅漢筆ずある含て極楽で
花の心をするやうに大かた今芸者之見花へ

表向一通りにて和歌俳諧を人にすゝんで嗜みたる者より
聡きものふきこ俗芸の者流花を生けさ花売りを
ぼふる深き苦行と号して立花の師匠と称る
俗に七を取て草を盛る枕に小石を並へ数盤の
石燈籠にあるらにして楽しむ見ホの人上ハ
斗りの付け焼出でいる皆わん〳〵是れ数え花を
生んより、心の花の色へ深きをしらざと
云外に商人もわん世の探鼻て秦を伝し
春をあるら漢楚軍談三国志の数を奏薫稽
小寄りかゝつて讀んで居る中以下本

商人今の世はいかさまのありゆゑありて乃人用
いはずしてあの亭主は家業を継ぎたるでこの
中にもむづかしき事をよみ読と二つ毎も利益を
負けるく世界の奴が参る中に仕合せく目利
自慢があらじて似せ政宗の雄戸清の売るもの
を錆はどうちく手あり申せうと云ふ族
皆七月と云ふものを縁句して我しが中くる
猿は冠をかぶせ犬は烏帽子をきせて其位に
到りしと云ふ天運循環と云ふ物にして其利の人
願ひごとをするはとうしられ一隊下の下部

愚ろうでは貧乏太郎神は運の神と名付てむせうに排
夜光を払つともでも逆運の神ざうらう強ふな
そのさうなり小ろ皆胴取の方へむちをとりまき
佞云してうけつこともしくとまく漸く本改を
弁を騙して行きつりでつゞろそろそろ勢あまりて海く
酒店へ送るとを運ぶばは夜食と金を云ふは此等の人
渡世の市にて太黒を盗むと仕合が縫ひと云ふ悪
心を起し犯ひ灯は何町若者講中と書いてある
を焼して祝詞歌和讃念仏とやて上りつきさしの
手拭を頭冠りのほうにはまだ全口へ塗付顔を復て

索八が突ッかゝる松の根で帰命頂礼地蔵尊

と云声もろとも同音に釈迦のふと読経し、と唱れバ

障子を細目にあけて見ると、やせ〳〵と此頃ゐ気のひさ

始がと綴りもそと〳〵身を拗やくにして受

とふ是を名付て世間仏法者仏と云彼

等が毎晩出かり悪と滑らぬ銭で寺の建たるとらず

仏の御代ちよ人の命とるがしく腹の出来る所が

双伝二分かしら見もまた唱が分ら無き念仏を

やつて悟へと志んでもしおらしかしれぬ命の

気も角差遠ひの雨云ハ晴れ無から他に損ふとも

浮入とせ無常にはきんき考へと我く八人目り毛が

こなたハ思と迄まても詮なき生所ときゝ

ろし役目とのがれ給ふ持を唸せし後と夕

せし戦ニ梨事の御供は日本一の茶菜子を喰

ろまく名人目と生れて、積組悪とかハ言と

ありく毛の三本多ひ惣りより子ると積とふひ

おふ夕云仰飛木の住寺では名ひがへの

麻り一丁を出りは里

極さんと和ぐる鬼の兼云

皆一の[illegible]裾りはげく我く親父も来るぞづ

なげりますが去年は大晦日が節季ぐとまへ分て
来られました芝口へ一度りやあげましに
云附ましたとぞつらいと云ふがしらぬ出まし所が
まる銭湯の眉に済り丹花の口付き柔らかく桃李の
粧ひ芙蓉の眸緑の黛雪の肌へ毛嬙西施の面
余りの御器量の容を妖桃の春をいさめる百れ
媚ハ小野小町が残りと成にかつとどめの粧態
身ともつき下へ居りは御免なりまし私ハ口不調
法くとぞ申しさや屋りおすまつ皆人が蛇ほん
なるとのは鬼よ蛇よとぞ云ふのへどもんの鬼よ

未だ世を秘しまて虎の皮の下帯とする姿り小袖
緋縮緬の湯巻をしめ年頃る浪の姿とういへ頭へ
五分月代に入よつれ皮を千枚張と恐ろしく言へられて牛
つくと佳きなる呼る波の程に居わき面ハ乃云
合をする奴が髪さる屋し人の子をと喜ハ文を
野郎娘と住よく妄葉云を勤させ人ハの鬼になる死
ふぶら様是れの数と皆人鬼の女房に鬼神が寄
とこへとも鬼神も鬼とも一つなるの胸し後アれ
継が羅生門の金札の立寺も家は頭勇なの手不偏母に
化く東る鬼名抱ハ紙の上て子等茶野道し色の

鬼にて孟嘗君が函谷関の鶏の声色を学ぶ
さ馮諼と云者地獄へ落て鬼に出世して奴
となりし拾遺集に平兼盛がよみし歌
黒塚と詠じし源重之が妹のもとに行く鬼に
強請なるなど云く冠者伊勢平家を
云奴と断道りとなる肉の渡りには鬼の目に淚
とはこの目を今の急とし己が子を捨て人に捨て
世の人と銀目をもらひて居る肉の皮衣かきてを
き仲家の厄がおもしろく親も古今の鬼に
目とめて山として六十の数を合せしも今は

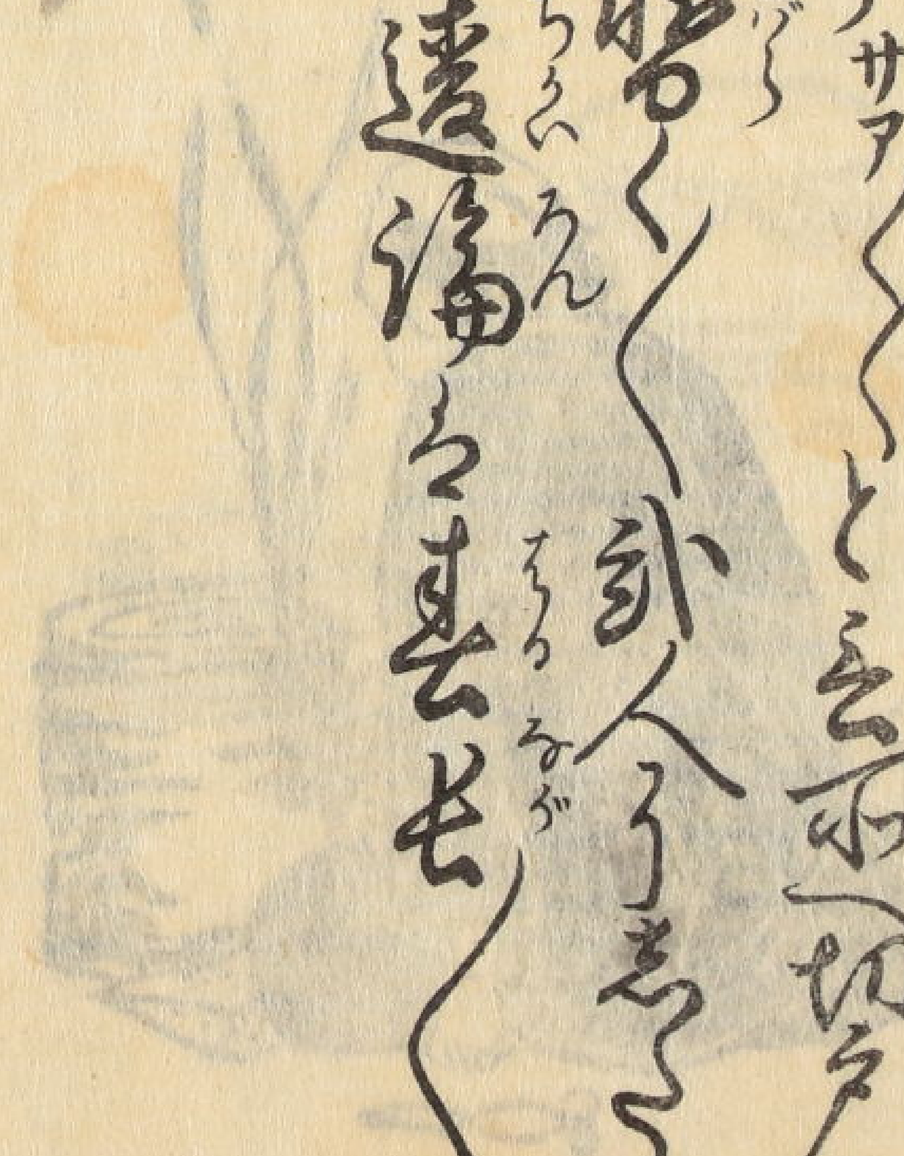
七八九の女郎お店にて客の鶴の大きさもの名付け
らまし子供の鬼事小さき天魔が来て見をとる
我らは為に洗濯と往く又鬼と出るもきびしく
かし酒し気の形には浮気と居処に止め古く
ありて石菖を植て鉛を明ず書判を看板
往く箸を取て者さ官鬼の文小さき町人
来てすと乞ふ師匠の前の章と見と
のがれ悪に志すれば鬼と外福内と
胴の方らし升へ入れて豆で蔵らし漸
疱瘡神の法施宿とする内ぞ斗り入を流く

まきで拵へて神棚に祭ひ供を並ひて幸福が
這入さしと待居る内へ逃込んで一夜を
明させて貰ひしぞ鬼を逃さぬやうにとのことと
云ふがゆゑ鬼神に模したるもの角人あるハ
様の模ぞ多かりしかば縦く既にあつて已に節磨の
息長の老婆藍陀鬼と云ふ鬼あつて十歳以下の
子供をとりしれば大理にある陽の初めの日に御所へ
あつりほうとろや草も木もうつ大君の地にあれば
構なる鬼の住家なりてんときくから八人面
獣心のものを追ひ逃して然れ鬼にする者を罪なすべき

なく様の気を求ればよ往古と初手の刀誠入道から
万八千三つれ噓ゆしと世の人乃春の笑ひに備ふる
と云て二人の夢を見せさせる所だがマア夫ハなし
にも為やせらと云でも妻ぞの百鬼夜行の本
れ中ろ大鑑の書でりりやア何のる夕ぎりを
往ひ小女の癖よその中にも可笑そふな武人
わずか邪魔乃人家御出とよん中に寝して
乗り出るものと云でも鬼も祝に似思
子ハ鬼子でも鬼若丸ハ八人中も刀尻しさ
から一座り二人を寝かして。盃頭句をおゆ

神助
高端
多和毛
宇奴恩、
確も
見江ゝ房
社中

ありますしと云ふて又大勢のゑいで云屋らが
画ひとつ立て両国橋くさんせ物の書を留書と
云へる此娘鬼谷町といひならる江戸の花
吉原時斗とうたさらいんやそをもハ寝ある思ひを
武人と起すう起さ思うサアくと云示切戸口の
方て本屋の哀として皆くく武人ろちろく
鼾とかくせて後篇ろ遺編る甚もくく
ホヽ
敬白



後篇
大通間違論　五冊　近刻

化物摸羅出来顔　喜の芝　燕十

安永九年
子の春
東都書林
雪華堂